OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	板本『枕草子春曙抄』の諸本系統 : 板木の利用状況の考察を中心に
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	語文. 2012, 99, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70892
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

板本『枕草子春曙抄』の諸本系統

――板木の利用状況の考察を中心に――

宮川真弥

一　はじめに

北村季吟著『枕草子春曙抄』（延宝二年〈一六七四〉七月成立〈自跋〉）（以下、『春曙抄』とする）は、明治に至るまで複数の書肆によってたびたび刷行され、『枕草子』の流布本的位置を占めた注釈書である。

その諸本については、既に野村貴次氏[1]、荒滝雅俊氏[2]、山崎正伸氏[3]の研究があり、覆刻版の存在や、季吟自身によって数次の修訂が行われたことなどが確認されている。

しかし、諸本の関係や系統が十分に明らかになったとはいえず、いずれの伝本を初版初印と認めるかについても説が分かれている。そこで、本稿では、主として匡郭縦寸と本文異同との比較調査により、『春曙抄』の諸本系統を明らかにすることを目的とし、併せて覆刻が行われた経緯や、書肆間での板木の移動の様相、及び、各書肆の板木の利用状況にも考察を及ぼすこととする。

二　『春曙抄』の刊記

『春曙抄』は、跋文にある「延宝二年甲寅七月十七日」よりさほど時を経ぬ頃から、明治にかけて、二百数十年ものあいだ刷り続けられてきた。そのことは奥付からも窺える。『春曙抄』には、壺井義知著・多田義俊校『清少納言枕草紙装束撮要抄』（以下、『装束抄』とする）が附されるものもあるため、『装束抄』の刊記も併せて以下に列挙する[4]。略称は私に附した。

（一）無刊記本　『春曙抄』（無刊記）
（二）上坂本　『春曙抄』（無刊記）
　　『装束抄』皇都　四条通京極西入町／享保十四年己酉卯月下旬　上坂勘兵衛源兼勝発梓
（三）山崎本　『春曙抄』（無刊記）

『装束抄』　寛政元巳戊(ママ)年初冬／本石町通十軒店／山崎金兵衛梓[5]

（四）伊八高橋本『春曙抄』　寛政六甲寅年七月購版／江都書林　東叡山池之端仲町　須原屋伊八／同町　高橋与惣治[6]

『装束抄』　寛政元巳戊(ママ)年初冬[7]

（五）伊三郎本　『春曙抄』　寛政六甲寅年七月購版／江戸浅草茅町二丁目　須原屋伊三郎[8]

（六）伊八本　『春曙抄』　寛政六甲寅年七月購版／江戸浅草茅町二丁目　須原屋伊　八[9]

（七）橋本本

『春曙抄』　寛政六甲寅年七月購版　江戸浅草茅町二丁目　須原屋伊八／明治二十年九月求版主　東京南葛飾郡寺島邨千百十七番地　橋本幸蔵[10]

（八）博文館本

『春曙抄』　明治廿七年五月十九日翻刻〈印／刷〉／同年五月廿二日発行／〈発行兼／印刷者〉大橋新太郎／日本橋区本町三丁目八番地／発行書肆〈東京同町／博文館〉

現存の伝本は刊記によって以上の八種に大別される[11]。本稿では、【附記】に示した①無刊記（春334）から⑱博文館（春386）までの18本を主として取り扱う。なお、【附記】に書誌を示した伝本については略称を用いる。

これらの伝本について異同を調査し、併せて全丁の匡郭縦寸[12]を比較した[13]。紙幅の都合で全丁について測定値を掲出することは叶わないため、諸本間の差異が顕著な巻十一の匡郭縦寸のみを【表一】として本稿末尾に附す。この比較の結果、これらの伝本に用いられている板木は、匡郭縦寸の長短によって、原版と覆刻版との二種に弁別できることが判明した。

（一）無刊記本の内には、総て原版を用いたものと総て覆刻版を用いたものとがあり、その他に数種、それらの板木を取り合わせて用いたものがある。（二）上坂本の内、（三）山崎本の内にも、板木の取り合わせ方が数通り存在する。そして、（四）伊八高橋本以降は板木の取り合わせ方が一定となる。

以上のように、同じ刊記を有する伝本間でも差異があるため、刊記による分類では不十分である。また、二種の版を取り合わせて使用する伝本が存在するため、本文異同による分類では諸本を十分に弁別できない。そのため、本稿では全丁の計測が可能な匡郭縦寸による分類を用い、改めて諸本系統を整理することとする。

三　原版と覆刻版

先述の通り、（一）無刊記本はいくつかの伝本群に分類できる。まず、（一）無刊記本の検討において注目すべきは、季吟が使用した「慮庵」印の押してある伝本群である。北村季吟古註釋集成の底本である大和屋文庫蔵本[14]（以下、「大和屋文庫本」とする）の他、①無刊記（春334）・②無刊記（学5002）・③無刊記（宣長）な

どが[15]この伝本群に属する。

これらの伝本は取り合わせ本などを除き、【表一】【表三】①無刊記（春334）・②無刊記（学5002）・③無刊記（宣長）に示したように、匡郭縦寸の推移を同じくする。「慮庵」印はないものの、④無刊記（春351）・⑤無刊記（春347）も①②③の伝本と同様の匡郭縦寸の推移を見せるため、同版を用いていることがわかる。これらの現象は『春曙抄』全335丁において同様であるため、まずはこれらを原版と見ることができよう。以下、全丁を通じて原版を用いた無刊記の伝本を無刊記本（原版）と呼ぶ。なお、①無刊記（春334）に「延宝六午文月上　競」との識語があり、実際に校合が行われている点から、これ以前に『春曙抄』の頒布があったことが知られる[16]。

対して、⑥無刊記（神宮）は①無刊記（春334）に比して、匡郭縦寸が平均して〇・五六糎ほど収縮しており[17]、荒滝氏[18]の指摘する通り、覆刻版を用いた伝本と見られる。なお、⑥無刊記（神宮）には元禄六年に奉納した旨の識語があるため、これ以前には覆刻版が作製されていたことが知られる。以下、全丁を通じて覆刻版を用いた無刊記の伝本を無刊記本（覆刻版）と呼ぶ。

四　匡郭縦寸の推移による版の同定

さて、覆刻版は原版に比べて匡郭縦寸が縮むことはよく知られている[19]。その要因については、版下の収縮[20]や、板木の含水率の低下による板木自体の収縮[21]であろうとされる。人為ではなく物理的な要因で収縮を見せるとすれば、覆刻の際の収縮率には自ずから偶発的な差異が生じることとなろう。同じ版下を用いたとしても匡郭縦寸が全く同じ板木を再現することは困難であり、各丁の匡郭縦寸の現れ方はそれぞれの板木において一回的なものであると考えられる。版下の収縮や、板木の含水率の低下が収縮の要因だとすると、ことは覆刻版にとどまらず、総ての整版において同様の現象が生じよう[22]。

一方、同版においても、伝本によっては匡郭縦寸に一定の拡縮を見せる場合がある。【表二】を参照されたい。

例えば、⑤無刊記（春347）は早印の①無刊記（春334）に比して、多く〇・一～〇・二五糎（〇・三五糎が1例）の収縮を見せる。

他方、⑮伊三郎（春373）は早印の⑭伊八高橋（春375）に比して〇・〇五～〇・二糎の拡大を見せ、⑱博文館（春386）は早印の⑯伊八（架蔵）に比して一部〇・〇五～〇・一糎の拡大を見せる。

これらの一見相反する現象については、板木の含水率による拡縮を用いて仮説を立てることができる。

前者の無刊記本（原版）においては本文の異同によって刷りの先後が判明するが、一般に後印本になるほど、つまり、①から⑤の順で、収縮の度が大きくなることが確認できる。これは経年による板木の含水率の低下による収縮現象と見られる。

後者の⑮伊三郎（春373）と⑱博文館（春386）とはそれぞれ前述の早印本に比し、版面が顕著に鮮明になる。あくまでも憶測に過ぎないが、これは念入りな洗浄をし、その際に吸水をして含水率

が高くなったためではないだろうか。これらを証明することは困難であるが、版面の状態と刷りの先後とを勘案すると、今次の調査からは以上の仮説が導かれる。博雅の御示教を請う。

ともあれ、同版においては、匡郭縦寸の拡縮が全丁を通じてほぼ一定であるため、匡郭縦寸の推移がほぼ同様の様相を示す。対して、別版の場合は同じ丁の匡郭縦寸の値に大きな差を生じることがしばしばある。これらのことは、匡郭縦寸の推移を比較することによって、版を同定できることを示唆している。なお、『春曙抄』の版には原版と覆刻版との二種しか存在しないため、覆刻でない別版との比較は不可能である。この点の詳細な検証については別稿を期したい。

五　本文異同

従来、『春曙抄』の諸本には複数の本文異同が指摘されている。[23]【表二】を参照されたい。なお、稿者が異同18・19を追加した。

これらの内、異同1・2・5・6・7・8・9・10・14・16・18・19については、無刊記本（原版）の諸本間に異同が生じており、修訂の結果生じた異同と考えられる。無刊記本（原版）を除く諸本は、修訂後の本文を有する箇所では匡郭縦寸の推移を無刊記本（原版）と同じくし、修訂前の本文を有する箇所では匡郭縦寸の推移を無刊記本（覆刻版）と同じくする。このことは無刊記本（覆刻版）が無刊記本（原版）の初版初印本に極めて近いものを版下としたことを示している。

異同4・11・12・13・17は振り仮名の有無である。山崎氏は⑦無刊記（三原）を初版初印本と見て、後にこれらの振り仮名が附加されたと考えられた。しかし、『春曙抄』の諸本において、振り仮名を有するものの匡郭縦寸が長く、有しないものの匡郭縦寸が短いことは、これらの異同が原版と覆刻版との間の異同であることを裏付ける。すなわち、如上の5箇所の異同は覆刻の際の彫り落としによるものと見るべきである。異同15は「一」の有無であるが、同様の理由で彫り落としと見られる。なお、⑦無刊記（三原）が初版初印本でないとする理由は後述する。

異同3は「二」の有無であるが、⑭伊八高橋（春375）では掠れており、⑫上坂（春359）では僅かに細い線が見える。いずれもこの箇所において無刊記本（原版）と匡郭縦寸の推移を同じくすることを踏まえると、原版の経年劣化により当該箇所が削れていったものと見られる。

これらの異同の現れ方と匡郭縦寸の長短との関係には矛盾がなく、匡郭縦寸の長短による分類は有効であることが確認できる。

六　無刊記本以外の諸本

ついで、（二）上坂本以下の諸本の検討をする。

（二）上坂本の⑩上坂（架蔵）・⑪上坂（春361）・⑫上坂（春359）は、【表一】【表三】に示したように、多くが4丁を単位[24]として不規則に原版か覆刻版と同様の匡郭縦寸の推移を見せる。紙幅の都合で載せられないが、（一）上坂本同士で全丁を通じて同様の匡

郭縦寸の推移を見せるものも存在する。[25] このことは上坂勘兵衛が原版と覆刻版との二組の板木を所有し、組み替えて刷行していたことを示している。或いは板の摩耗対策として、適宜使用する板を変えていたのではないだろうか。

（三）山崎本に関しては、『割印帳』[26]の寛政元年（一七八九）十二月二十五日付の記事に「〈寛政元酉冬[27]／一 枕双紙春曙抄／墨付三百六十丁〉〈再／全十三冊〉〈願人板元／同人（稿者注：山崎金兵衛）〉」と見え、ここで主たる版元が京から江戸に移っていることが確認できる。なお、「再」とあるが、別版は生じていない。

（三）山崎本は、続く（四）伊八高橋本の刊記に見える寛政六年（一七九四）七月までの五年弱と短期間の出版と見え、残存点数も少ないようである。[28] そのためか、（二）上坂本ほどの異同の激しさはないが、（三）山崎本同士でも僅かながら差異はある。この差異がすなわち二組の版を所有していたことを示しはしないが、（四）伊八高橋本以降の諸本と匡郭縦寸の推移が完全には一致しないことを併せ考えると、山崎金兵衛も二組の板木を所有していた可能性が相当に存する。

（四）伊八高橋本以降の諸本は【表二】【表三】に示したように、総て全丁を通じて同様の匡郭縦寸の推移を見せる。（四）伊八高橋本以降、『春曙抄』の板木は一組のみが伝わっていったと見て良いだろう。残りの一組の行方は不明である。後考を俟つ。なお、（四）伊八高橋本の表紙見返しに「再板」と記すもの[29]があるが、ここでも別版は生じていない。

七　無刊記本における板木の混用

さて、『春曙抄』に関連した刊記は（二）上坂本の『装束抄』に享保十四年（一七二九）とあるものがその嚆矢であるが、それ以前にも『春曙抄』を取り扱っていた書肆があったことが書籍目録から判明する。元禄九年（一六九六）刊『増益書籍目録大全』[30]には「〈十二／山本八／小川〉同（稿者注：清少納言）春曙抄　北村季吟　九匁」と、京の山本八某と小川某との名が見える。

この記事と対応すると考えられる伝本に、柳枝軒小川多左衛門の広告が附されている⑦無刊記（茨城）がある。[31] なお、広告には「今昔物語〈和朝卅冊内十五冊／出来宇治大納言〉」とあり、享保五年（一七二〇）から同十八年に新刻された広告と知られる。[32]

【表二】に明らかなように、⑦無刊記（茨城）は無刊記本（原版）と同様の匡郭縦寸の推移を一部に見せる一方で、無刊記本（覆刻版）と同様の匡郭縦寸の推移を見せる箇所も存在する。なお、全丁に対しての原版の割合は2割強であり、巻七以降に集中する。[33] それらは多くが4丁を単位としており、印刷後に各丁を組み替えたのではなく、原版と覆刻版との板木自体が混用されていたことを示唆する。なお、⑧無刊記（三原）も全丁を通じて⑦無刊記（茨城）と同様の匡郭縦寸の推移を示すため、これらが取り合わせ本などではなく、刷行当時の原態を留めている伝本である蓋然性は極めて高い。以上のことにより、これらの伝本の成立が無刊記本（原版）よりも早いとは考えられない。

そして、興味深いのは、⑦無刊記（茨城）と対称的な匡郭縦寸の推移を示す⑨無刊記（春345）が存在する点である。⑨無刊記（春345）は、⑦無刊記（茨城）が原版を用いている丁では覆刻版を用い、覆刻版を用いている丁では原版を用いる。つまり、⑦無刊記（茨城）と⑧無刊記（春345）とが、原版と覆刻版とを分け合う形になっているのである。板木の移動に関する記録が見出せない以上、確言は不可能であるが、このような伝本が成立するに至る状況を考えてみたい。

板木が混用されている⑦無刊記（茨城）が、無刊記本（原版）や無刊記本（覆刻版）より後に成立したことは疑いない。そして、元禄九年刊『増益書籍目録大全』の「小川」が小川多左衛門のことを指すとすると、享保十四年刊の（二）上坂本よりも成立が早いということになる。まずはこれを前提とする。

一つには、原版と覆刻版の持ち主がそれぞれ板木の一部を相手方預けとした結果、混雑が生じたのではないかということである。

年代は下るが、『太平楽府』の版元である竹苞楼とその海賊版を出版した田中屋半兵衛とが、明和九年（一七七二）の和議の結果、一部の板木を互いに相手方預けとし、手持ちの板木のみでは完本を拵えられなくした事例を、永井一彰[34]氏が紹介している。

『春曙抄』においても同様に原版と覆刻版とを互いに持ち合ったものの、いくつかの板木において混雑が生じ、⑦無刊記（茨城）や⑨無刊記（春345）のような伝本が発生したとも考えられる。

この場合、覆刻版は海賊版ということになり、その作製者は小川らということになろう。ただし、初版初印に近い伝本を季吟生前にどこから手に入れたのかという疑問が残る。

もう一つには、季吟は元禄二年（一六八九）に江戸に召されるが、その際に原版を小川らに売り払ったのではないかということである。その場合、小川多左衛門と山本八某とで買い取り、原版と覆刻版とを分け合ったと考えるのが最も妥当だろう。

この場合には、覆刻版の作製を季吟が許していた可能性が生じる。例えば、無刊記本（原版）は門下生への配布用、無刊記本（覆刻版）は一般販売用などのように区別していたとも考えられよう。原版には逐次修訂が加えられているが、その中に「此草子第一の秘訣也〔中略〕此段可受師伝」と、門下生に対すると考えられる文言があることもこのような想像をさせる所以である。

八　終わりに

本稿では、主として『春曙抄』の諸本系統について考察した。

はじめに、遅くとも延宝六年（一六七八）七月までに無刊記本（原版）が成立した。現在確認される中では「大和屋文庫本」が最も初版初印に近い。

その後、初版初印に近い伝本を基に、遅くとも元禄六年（一六九三）までに無刊記本（覆刻版）が成立した。以降は原版と覆刻版との取り合わせ方が異なるのみであり、別版は生じない。

ついで、⑦無刊記（茨城）のような、無刊記の両版混用本が出現する。⑦無刊記（茨城）の成立は享保五年（一七二〇）から同

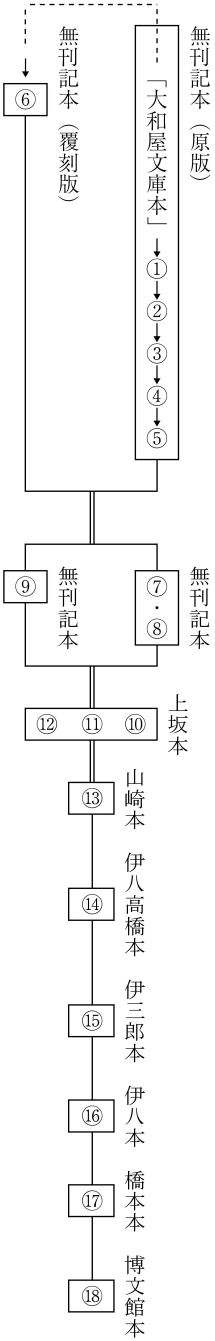
十八年頃だと推定される。この時点では、恐らく各書肆が板木を一組ずつ所持していたと考えられるが、新出伝本の如何によっては（二）上坂本同様、一書肆が両版を所持していた可能性もある。

享保十四年（一七二九）四月刊行の（二）上坂本に至り、両版を一書肆が所持するようになる。続く、寛政元年（一七八九）十月刊行の（三）山崎本も同様である。そのため、（二）上坂本や（三）山崎本では板木単位で本文異同が様々な現れ方をする。

寛政六年（一七九四）七月刊行の（四）伊八高橋本において、一書肆が板木一組のみを所持するようになる。これ以降は明治二十七年（一八九四）五月刊行の（八）博文館本まで同じ板の組み合わせで刷られ続けることとなる。

これらを踏まえて系統図を描くと左図のようになる。四角囲みをした各伝本群を繋ぐ線が単線の場合は一組、複線の場合は二組の板木が移動したことを示している。点線は覆刻の基となったことを示す。なお、⑦⑧⑨の箇所については暫定案である。

このような板木の混用は、異同や版面の比較のみでは判断がつきにくい。『春曙抄』の他にも、覆刻版が存在するものや同程度の判形の別版が存在するものにおいて、同様の現象が生じている可能性が多分にある。本稿で用いた手法がそのような場合に有効に機能しよう。本稿が一事例として参考となれば幸いである。



【附記】『春曙抄』諸本書誌一覧

〔凡例〕

・本稿で主として取り扱った伝本の書誌を、略称、所蔵機関、冊数、表紙色、表紙寸法（縦×横）、刊記、所蔵者整理番号、備考の順に記した。各項は空白で区切った。略称の丸数字は伝本群の成立順、同一伝本群内では伝本の成立順を推定して附した。

・総て大本、袋綴じであり、『春曙抄』は全12巻で欠巻はない。印記については、特記すべきもののみを備考に記した。

①無刊記（春334）　相愛大学図書館（春曙文庫）　6冊　朽葉色表紙　二七・〇糎×一九・七糎　春三三四　（一）無刊記本　巻十二24丁ウに「慮庵」印あり。第6冊裏表紙見返しに「延宝六午文月上競」と識語あり。異同1「利」に「木」を補筆する。異同16「きぬ

ひのせぬひ」のはじめの「ひ」にミセケチあり。表紙右肩に「共六／咸」と記した八角の紙を貼付する。

②無刊記（学5002）　学習院大学日本語日本文学科　6冊　浅葱色表紙　二七・一糎×一九・四糎　九一四・三一―五〇〇二　（一）無刊記本　巻十二24丁ウに「慮庵」印あり。第5冊裏表紙のみ後補縹色表紙。前後遊紙一丁あり（第5冊末のみ欠）。巻四、15丁と16丁とが乱丁。墨・朱書入あり。

③無刊記（宣長）　本居宣長記念館　12冊　朽葉色表紙　二七・三糎×一九・四糎　（一）無刊記本　巻十二24丁ウに「慮庵」印あり。本居宣長旧蔵。宣長自筆書入あり。

④無刊記（春351）　相愛大学図書館（春曙文庫）　6冊　青鈍色表紙　二七・三糎×一九・四糎　春三五一　（一）無刊記本　背に「共十二／共十二」とあり、もとは12冊本。題簽を重ねて貼付する。

⑤無刊記（春347）　相愛大学図書館（春曙文庫）　11冊　浅葱色表紙　二六・四糎×一九・五糎　春三四七　（一）無刊記本　巻七・八が合綴される。発一ノ一が発四の後にある。墨・朱書入あり。

⑥無刊記（神宮）　神宮文庫　12冊　青鈍色表紙　二八・〇糎×一九・七糎　和三門一七二九　（一）無刊記本　第12冊裏表紙見返しに「奉納／枕草子春曙抄　一部　十二巻／元禄六年／癸酉九月吉日　京清水新右衛門常之」と識語あり。墨・朱書入あり。

⑦無刊記（茨城）　茨城県立歴史館　6冊　青鈍色表紙　二七・四糎×一九・二糎　長島（照）家史料28、同33　（一）無刊記本　巻十二24丁ウに「日本橋　小川／書林柳枝軒／彦九郎」印あり。第6冊裏表紙見返しに茨城多左衛門の広告を附す。第1冊は長島（照）家史料33、第2～6冊は長島（照）家史料28。第1冊冒頭に後補の『装束抄』が合綴される。『装束抄』は紙の色が異なる。巻十、23丁が重複。巻十一、11丁が落丁。朱書入あり。

⑧無刊記（三原）　三原市立図書館　6冊　青鈍色表紙　二七・二糎×一九・五糎　（一）無刊記本

⑨無刊記（春345）　相愛大学図書館（春曙文庫）　12冊　青鈍色表紙　二七・〇糎×一九・〇糎　春三四五　（一）無刊記本　発端一ノ一なし。墨書入あり。

⑩上坂（架蔵）　架蔵　6冊　朽葉色表紙　二五・四糎×一八・八糎　（二）上坂本　第1冊は『装束抄』と『春曙抄』巻一・二とで構成される。

⑪上坂（春361）　相愛大学図書館（春曙文庫）　12冊附1冊　浅葱色表紙　二五・六糎×一九・二糎　春三六一　（二）上坂本　『装束抄』1冊を附す。発一ノ一が発四の後にある。

⑫上坂（春359）　12冊附1冊　浅葱色表紙　二七・一糎×一九・〇糎　春三五九　相愛大学図書館（春曙文庫）　（二）上坂本　『装束抄』1冊を附す。発一ノ一が発一の前にある。

⑬山崎（今治）　今治市河野美術館　12冊附1冊　浅黄色表紙　二六・八糎×一八・九糎　三一二―四二〇　（三）山崎本　『装束抄』1冊を附す。『春曙抄』第12冊末尾に山崎金兵衛（山金堂）の広告3丁を附す。墨書入あり。

⑭伊八高橋（春375）　相愛大学図書館（春曙文庫）　12冊附1冊　浅葱色小葵表紙　二六・〇糎×一九・一糎　春三七五　（四）伊八高橋本　『装束抄』1冊を附す。『春曙抄』第12冊末尾に須原屋伊八（青黎閣）の広告3丁を附す。『春曙抄』第12冊裏表紙見返しの刊記右側にも広告あり。

⑮伊三郎（春373）　相愛大学図書館（春曙文庫）　12冊附1冊　浅葱色小葵表紙　二六・一糎×一九・〇糎　春三七三　（五）伊三郎本　『装束抄』1冊を附す。

⑯伊八（架蔵）　架蔵　12冊附1冊　水色表紙　二五・九糎×一八・八糎　（六）伊八本　『装束抄』1冊を附す。『装束抄』表紙見返しに「北村季吟註／枕草子春曙抄〈再板／十三冊〉／東都書肆　青黎

閣」と印刷する。

⑰橋本（架蔵）　架蔵　6冊　山吹色表紙　二六・六糎×一九・六糎

（七）橋本本　第6冊は『春曙抄』巻十一・十二と『装束抄』とで構成される。第1冊表紙見返しの赤地の紙に「北村季吟註／枕草子春曙抄〈再板／十三冊〉／東都書肆　酔耕堂蔵梓」（⑯伊八（架蔵）に入木したもの）と印刷する。全冊裏表紙見返しに刊記が附される。

⑱博文館（春386）　相愛大学図書館（春曙文庫）　6冊附1冊　砥の粉色表紙　二六・一糎×一九・二糎　春三八六（八）博文館本　康熙綴じ。『装束抄』1冊を附す。『装束抄』表紙見返しの赤地の紙に「北村季吟註／枕草子春曙抄／東京書林　博文館蔵版」と印刷する。

注

（1）野村貴次『北村季吟古注釈集成解説　季吟本への道のり』（新典社、昭58・3、北村季吟古註釈集成　別1）

（2）荒滝雅俊「北村季吟著『枕草子春曙抄』の刊行年について」（『解釈学』10輯、平5・11）

（3）山崎正伸「北村季吟『枕草子春曙抄』の改訂版出版について」（『二松学舎大学論集』47号、平16・3）

（4）／は改行、〈〉は割注を示す。（）で備考を記した。以降同様。

（5）『装束抄』の刊記は（二）上坂本に入木したものである。

（6）『春曙抄』の刊記は多く最末冊裏表紙見返しに附く。以降の諸本も同様。なお、（四）伊八高橋本の刊記の半丁の右半分は広告である。

（7）『装束抄』の刊記は（三）山崎本の刊年以外を削ったものである。以降、（八）博文館本まで『装束抄』の刊記は同版のため省略する。

（8）『春曙抄』の刊記は（四）伊八高橋本とは別版である。

（9）『春曙抄』の刊記は（五）伊三郎本の書肆名を修訂したものである。井上和雄編・坂本宗子増訂『増訂慶長以来書賈集覧』（高尾書店、〔初版〕大5・9、〔増訂版〕昭45・12）には大槻如電氏の寄稿として、「二代伊八の時天保元年十二月火災に逢ひ浅草茅町に移転す」とあり、伊三郎から伊八への板木の移動、および（六）伊八本の刊行は天保元年十二月以降のことと推定される。

（10）『春曙抄』の刊記は（六）伊八本に入木したものである。

（11）ただし、刊記は多く『装束抄』に附き、『装束抄』を欠くと無刊記本と区別が附かなくなるものもあるため、留意が必要である。また、この他に無刊記の『春曙抄』に無刊記の『装束抄』が附属するものも見られる（架蔵本）。この『装束抄』は匡郭の縮み等から覆刻版と知られ、後述の⑦無刊記（茨城）に附属している『装束抄』と同版である。ともに後補の『装束抄』であり（架蔵本には判型を揃えるための化粧裁ちの跡が見て取れる）、少なくとも『春曙抄』に附属している『装束抄』は覆刻版ではないため、或いは覆刻版の『装束抄』は単独で販売されていたものとも考えられる。これは本稿の趣旨とは外れるため、別途調査を行いたい。

（12）各丁表、のど側の匡郭縦寸の内法を〇・〇五糎刻みで計測した。

（13）加えて、適宜、匡郭の欠損や字体などの比較を行い、版の同定を行った。また、調査においては、可能な限り、刊記ごとに複数の伝本を比較参照した。

（14）『枕草子春曙抄　上・下』（新典社、昭51・12～昭52・1、北村季吟古註釋集成3・4）

（15）他に、学習院大学日本語日本文学科蔵12冊本（九一四・三一―五〇〇二）、金沢市立玉川図書館近世史料館（稼堂文庫）蔵12冊本（〇九一・八―三〇三）、神宮文庫蔵12冊本（和三門四五四〇）、相愛大学図書館（春曙文庫）蔵11冊本（春三四八）、同蔵6冊附1冊本（春三六八）、東京都立中央図書館（加賀文庫）蔵4冊本

（加一〇五二）などが確認される。

（16）「大和屋文庫本」も版面や本文異同等から無刊記本（原版）と見られる。よって、延宝六年七月以前にも無刊記本（原版）が頒布されていたと見て誤るまい。

（17）収縮長はおよそ〇・一糎から一・一糎ほどの範囲で、〇・五～〇・六糎を中心として正規分布に近い分布をする。

（18）注（2）に同じ。

（19）木村三四吾「『西鶴織留』諸版考」（同『書物散策―近世版本考』八木書店、平10・10、木村三四吾著作集Ⅲ）（初出「西鶴織留諸版考」『ビブリア』28号、昭39・8）

（20）廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』（世界思想社、平10・5）

（21）金子貴昭「板本に表れる板木の構成―紙質・匡郭―」（『アート・リサーチ』12号、平24・3）

（22）『春曙抄』の原版が基にした版下の匡郭縦寸が二三糎であったと仮定すると、収縮長は注（17）の覆刻版の場合とほぼ同じく、およそ〇・一糎から一・一糎ほどの範囲で、〇・五～〇・六糎を中心として正規分布に近い分布をする。このことが傍証となろう。

（23）注（1）、（2）、（3）に同じ。

（24）従って、『春曙抄』の板木は4丁張りであったと推定される。

（25）例えば、相愛大学図書館（春曙文庫）蔵12冊附1冊本（春三六二）（二六・一×一九・〇糎）は、⑪上坂（春361）と同様の匡郭縦寸の推移を示し、表紙も同じものを用いている。

（26）朝倉治彦監修『割印帳　東博本　影印版　第三巻』（ゆまに書房、平19・8、書誌書目シリーズ83）

（27）寛政元年の干支は己酉であり、『装束抄』の刊記の「巳戊」は単純な誤りと見られる。

（28）国文学研究資料館『日本古典籍総合目録データベース』による

と、⑬山崎（今治）以外の完本は東海大学（桃園文庫）蔵11冊本（桃一八　四六）のみとのことである。なお、稿者が完本を一組架蔵する。

（29）相愛大学図書館（春曙文庫）蔵12冊附1冊本（春三七七）（二六・〇×一九・一糎）など。

（30）慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成(2)』（井上書房、昭38・6）

（31）売り捌き店と見られる小川彦九郎の印が押されており、江戸での流通のあったことが知られる。

（32）ただし、広告の23項目中、末尾の2項目分を印刷で墨消ししている。なお、『春曙抄』については「清少納言春曙抄〈十二冊／季吟〉」と記される。

（33）具体的には、巻七12丁（5～16丁）、巻八10丁（9～12丁、17～20丁、25丁、26丁）、巻九30丁（1～30丁の全丁）、巻十8丁（21～28丁）、巻十一12丁（5～8、13～20丁）の合計72丁である。

（34）永井一彰「竹苞書楼の板木―狂詩集・狂文集を中心に―」（『総合研究所所報』（奈良大学総合研究所）第15号、平19・3）

※引用に際しては適宜通行の字体に改めた。

本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧・撮影等にご高配を賜りました各所蔵機関、特に多くの資料を提供いただきました相愛大学図書館に深謝申し上げます。

（みやがわ・しんや　本学大学院博士後期課程）

【表一】『春曙抄』諸本巻十一匡郭縦寸対照表

〔凡例〕・伝本の呼称は【附記】の略称に従う。

・各伝本の当該丁表ののど側の匡郭縦寸の内法を○・○五糎刻みで計測し、値を示した。単位は糎である。無刊記本（覆刻版）（⑥無刊記（神宮））と同様の匡郭縦寸の推移を示すものに網掛けをした。

・各伝本を伝本群ごとに二重線で区切った。

巻十一	①無刊記（春334）	②無刊記（学5002）	③無刊記（宣長）	④無刊記（春351）	⑤無刊記（春347）	⑥無刊記（神宮）	⑦無刊記（茨城）	⑧無刊記（三原）	⑨無刊記（春345）	⑩上坂（架蔵）	⑪上坂（春361）	⑫上坂（春359）	⑬山崎（今治）	⑭伊八高橋（春375）	⑮伊三郎（春373）	⑯伊八（架蔵）	⑰橋本（架蔵）	⑱博文館（春386）
1丁オ	22.05	22.00	22.00	22.00	21.90	21.65	21.60	21.60	21.95	21.70	21.80	21.70	21.65	21.70	21.80	21.75	21.70	21.75
2丁オ	21.90	21.90	21.85	21.90	21.70	21.45	21.30	21.45	21.80	21.50	21.80	21.45	21.50	21.50	21.60	21.55	21.55	21.60
3丁オ	22.20	22.20	22.10	22.15	21.95	21.25	21.20	21.20	22.10	21.30	22.05	21.20	21.30	21.25	21.30	21.30	21.30	21.35
4丁オ	21.85	21.80	21.70	21.80	21.50	20.90	20.90	20.80	21.75	21.00	21.70	20.90	20.90	20.90	21.10	21.00	21.00	21.00
5丁オ	22.40	22.40	22.35	22.40	22.30	21.90	22.30	22.30	22.00	22.00	22.30	21.90	21.95	21.90	22.05	22.00	21.95	22.00
6丁オ	22.30	22.30	22.30	22.30	22.20	21.90	22.20	22.20	21.90	21.95	22.30	21.85	21.90	21.95	22.00	21.95	21.90	22.00
7丁オ	22.50	22.45	22.40	22.45	22.35	21.90	22.30	22.35	21.95	22.00	22.35	21.95	21.95	22.00	22.05	22.00	22.00	22.00
8丁オ	22.70	22.60	22.60	22.60	22.55	22.20	22.50	22.50	22.10	22.20	22.55	22.15	22.20	22.25	22.35	22.20	22.25	22.30
9丁オ	22.30	22.30	22.20	22.25	22.05	21.85	21.80	21.80	22.15	21.90	22.10	21.80	21.90	21.85	22.00	21.90	21.90	21.95
10丁オ	22.40	22.40	22.40	22.40	22.20	21.90	21.90	21.90	22.30	22.00	22.20	21.95	22.00	22.00	22.10	22.00	22.00	22.00
11丁オ	22.40	22.35	22.30	22.30	22.15	21.90		21.85	22.30	22.00	22.20	21.90	21.95	21.95	22.00	21.95	22.00	21.95
12丁オ	22.30	22.30	22.20	22.30	22.10	21.80	21.80	21.80	22.20	21.90	22.15	21.80	21.85	21.85	21.95	21.90	21.95	21.90
13丁オ	21.85	21.75	21.80	22.85	21.75	21.30	21.70	21.70	21.30	21.35	21.40	21.75	21.35	21.40	21.50	21.45	21.40	21.50
14丁オ	22.20	22.20	22.20	22.15	22.05	21.60	22.05	22.05	21.60	21.70	21.65	22.00	21.70	21.70	21.80	21.80	21.75	21.80
15丁オ	22.00	22.00	22.00	22.00	21.85	21.40	21.90	21.80	21.45	21.50	21.45	21.90	21.50	21.45	21.55	21.50	21.45	21.55
16丁オ	22.45	22.40	22.30	22.40	22.20	21.90	22.20	22.20	21.90	21.90	21.95	22.20	21.95	21.95	22.05	21.95	22.00	22.00
17丁オ	22.70	22.70	22.70	22.70	22.60	22.20	22.60	22.50	22.20	22.25	22.60	22.20	22.20	22.20	22.35	22.30	22.30	22.30

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
18T オ	22.70	22.60	22.60	22.65	22.60	22.10	22.55	22.55	22.10	22.15	22.55	22.15	22.15	22.10	22.30	22.20	22.20	22.20
19T オ	22.60	22.55	22.60	22.60	22.50	22.10	22.50	22.50	22.10	22.10	22.50	22.15	22.20	22.10	22.30	22.25	22.20	22.25
20T オ	22.55	22.50	22.50	22.60	22.40	22.05	22.40	22.40	22.05	22.05	22.40	22.10	22.10	22.10	22.20	22.20	22.15	22.20
21T オ	22.60	22.50	22.60	22.60	22.50	21.70	21.70	21.65	22.50	21.80	21.75	22.45	21.70	21.75	21.90	21.80	21.85	21.80
22T オ	22.35	22.35	22.40	22.35	22.20	21.90	21.80	21.75	22.30	21.90	21.90	22.25	21.85	21.85	21.95	21.85	21.85	21.90
23T オ	22.55	22.55	22.60	22.50	22.40	22.15	22.10	22.10	22.50	22.20	22.10	22.50	22.10	22.15	22.20	22.15	22.20	22.20
24T オ	22.55	22.50	22.55	22.60	22.45	22.05	21.95	22.00	22.55	22.10	22.00	22.45	22.10	22.05	22.20	22.10	22.15	22.10
25T オ	22.50	22.45	22.50	22.50	22.30	21.90	21.80	21.80	22.35	21.90	21.80	21.85	21.90	21.90	22.00	21.90	21.90	21.90
26T オ	22.50	22.45	22.50	22.55	22.35	22.10	22.10	22.00	22.40	22.10	22.30	22.10	22.40	22.40	22.50	22.40	22.40	22.40

【表二】『春曙抄』異同箇所一覧

〔凡例〕・「項番」は便宜上の通し番号、「所在」は当該異同の『春曙抄』における位置を示す。

・「項番」ごとに、「異同箇所」を掲出し、異同箇所に傍線を附した。文字のない箇所については（空白）と記した。また、それぞれの異同に「異同箇所」と対応する「略称」を附けた。異同については初版初印に近いと考えられるものを上に記した。

・異同の掲出順と「略称」とは、対照の便宜上、山崎正伸氏（注（3））に従った。新出の異同（異同18・19）は末尾に附した。

・「備考」として、異同の端的な説明を附した。

項番	所在	略称	異同箇所	略称	異同箇所	備考
異同1	巻一　発端1丁オ　3行目	甲	利壷の五人のひとり也	乙	梨壷の五人のひとり也	本文異同。
異同2	巻一　発端1丁オ　3行目	無	（空白）	有	〈天暦五年梨壷にて能宣元輔／順時文望城等後撰をえらへり〉	記事の追加。
異同3	巻一　発端3丁オ　7行目	○	安貞二年三月	×	安貞（空白）年三月	本文の欠損。
異同4	巻二　14丁オ　頭注6行目	アリ	宇治の中君に	ナシ	宇治の中君に	傍訓の有無。
異同5	巻三　7丁オ　頭注12行目	甲	それしも葉かへせぬ 椎の木をしもとの心也へいつとなく葉がへぬ	乙	それしも葉かへせぬ 椎の木をしもとの心也へいつとなく葉がへぬ	本文異同。

異同6		山の椎柴に人の心をなすよしもかな　堀河次郎百首に仲実の哥也猶古哥尋ぬへし	山の椎柴に人の心をなすよしもかな〳〵箸鷹のとかへる山の椎柴の葉かへはすとも君はかへせじ		
異同7	巻三　9丁オ　頭注20行目	甲	出雲の国におはしける御事をおもひて人丸かイニ御供にて人丸かとあり。此事不審也拾遺ニ人丸〳〵足ひきの山路もしらす白樫の枝にも葉にも雪のふれゝはとあり此哥の事にや	乙	出雲の国におはしける御事をおもひて人丸かイニ御供にて人丸かとあり。此草子第一の秘訣也拾遺ニ人丸〳〵足ひきの山路もしらす白樫の枝にも葉にも雪のふれゝはとあり此段可受師伝
異同8	巻三　16丁オ　1行目傍注	甲	円機活法云。相鶴経云。	乙	（空白）相鶴経云。
異同9	巻三　23丁オ　頭注5行目	甲	形ナリとよむ さはきてたるも 此詞亦可勘	乙	（空白） さはきてたるも 髪さばきたる也　ては助字也
異同10	巻四　12丁ウ　3行目傍注	甲	几帳	乙	袖几帳栄花物語にも有詞也
異同11	巻六　2丁オ　4行目	アリ	しげいしやは見奉（たてまつ）りしやととはせ給へば。	ナシ	しげいしやは見奉りしやととはせ給へば。
異同12	巻六　2丁ウ　頭注4行目	アリ	紅梅は十一月より二月迄（ニアテ）兼用の衣也。	ナシ	紅梅は十一月より二月迄兼用の衣也。
異同13	巻六　2丁ウ　頭注13行目	アリ	されど紅梅は紅に重（カサネ）ては似合ずと也。	ナシ	されど紅梅は紅に重ては似合ずと也。
異同14	巻七　20丁オ　頭注1行目	甲	（空白）	乙	うと濱駿河舞也　袖中抄に有
異同15	巻十一　14丁オ　4行目傍注	○	一条禅閤御説	×	（空白）条禅閤御説
異同16	巻十二　21丁ウ　頭注8行目	甲	きぬひのせぬひ	乙	きぬ（空白）のせぬひ
異同17	巻十二　22丁オ　頭注17行目	アリ	よしなしと制（ヒ）したる事あり	ナシ	よしなしと制したる事あり
異同18	巻二　16丁ウ　頭注12行目	甲	ゆふかみとも　黒駒を云也	乙	ゆふかみ　八雲云馬の髪白き也
異同19	巻四　6丁ウ　頭注2行目	甲	（空白）	乙	拾玉集みな月や絶ぬ祭の馬長にいと、そはやる祇の園生は慈円

異同6	本文異同。
異同7	引用元注記の削除。
異同8	傍注の削除。
異同9	本文異同。
異同10	記事の追加。
異同11	傍訓の有無。
異同12	傍訓の有無。
異同13	傍訓の有無。
異同14	記事の追加。
異同15	傍注の有無。
異同16	衍字の削除。
異同17	傍訓の有無。
異同18	本文異同。
異同19	記事の追加。

【表三】『春曙抄』諸本本文異同・匡郭縦寸対照表

〔凡例〕・伝本の呼称は【附記】の略称に従う。

・異同の項番は【表二】と対応する。ここでは所在順に並び替えた。

・各異同の上欄に各伝本の当該丁表ののど側の匡郭縦寸の内法を○・○五糎刻みで計測し、値を示した。単位は糎である。無刊記本（覆刻版）（⑥無刊記（神宮））と同様の匡郭縦寸の推移を示すものに網掛けをした。

・各異同の下欄に各伝本の異同状況を略称で示し、修訂・覆刻後の形と考えられるものに下線を附した。略称は【表二】と対応する。

・各伝本を伝本群ごとに二重線で区切った。

	「大和屋文庫本」	①無刊記（春334）	②無刊記（学5002）	③無刊記（宣長）	④無刊記（春351）	⑤無刊記（春347）	⑥無刊記（神宮）	⑦無刊記（茨城）	⑧無刊記（三原）	⑨無刊記（春345）	⑩上坂（架蔵）	⑪上坂（春361）	⑫上坂（春359）	⑬山崎（今治）	⑭伊八高橋（春375）	⑮伊三郎（春373）	⑯伊八（架蔵）	⑰橋本（架蔵）	⑱博文館（春386）
異同1		22.50	22.40	22.50	22.50	22.35	22.20	22.20	22.20	22.40	22.45	22.50	22.45	22.35	22.50	22.60	22.55	22.60	22.60
	甲	甲	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
異同2		22.50	22.40	22.50	22.50	22.35	22.20	22.20	22.20	22.40	22.45	22.50	22.45	22.35	22.50	22.60	22.55	22.60	22.60
	甲	甲	甲	乙	乙	乙	甲	甲	甲	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
異同3		22.50	22.40	22.50	22.55	22.40	22.15	22.15	22.10	22.40	22.40	22.45	22.40	22.40	22.50	22.55	22.45	22.50	22.50
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×（ホボナシ）	×（ホボナシ）	×（カスレ）	×	×	×	×（カスレ）
異同4		22.50	22.50	22.50	22.50	22.40	22.10	22.00	21.90	22.40	22.30	22.50	22.40	21.95	22.00	22.10	22.00	22.10	22.00
	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	アリ	アリ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
異同18		22.55	22.50	22.50	22.50	22.40	22.00	22.00	21.95	22.45	22.40	22.45	22.45	22.00	22.00	22.10	22.05	22.10	22.05
	甲	甲	甲	甲	甲	乙	甲	甲	甲	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲
異同5		22.45	22.40	22.45	22.40	22.25	22.10	22.15	22.00	22.40	22.10	22.40	22.30	22.25	22.00	22.15	22.10	22.10	22.10
	甲	甲	甲	甲	甲	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲
異同6		22.45	22.40	22.45	22.40	22.25	22.10	22.15	22.00	22.40	22.10	22.40	22.30	22.25	22.00	22.15	22.10	22.10	22.10
	甲	甲	甲	甲	甲	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲

	「大和屋文庫本」	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
異同7		22.60	22.55	22.60	22.60	22.50	22.25	22.20	22.10	22.50	22.20	22.60	22.50	22.55	22.55	22.65	22.55	22.60	22.60
	甲	乙	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
異同8		22.40	22.35	22.40	22.40	22.10	21.75	21.70	21.70	22.35	21.75	22.40	22.40	21.70	21.70	21.80	21.75	21.80	21.80
	甲	乙	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲
異同9		22.60	22.50	22.50	22.55	22.50	21.75	21.80	21.60	22.50	21.80	22.50	22.50	22.45	22.50	22.60	22.50	22.55	22.55
	甲	甲	甲	甲	甲	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
異同19		22.20	22.20	22.20	22.20	21.95	22.10	22.10	22.00	22.20	22.10	22.25	22.20	22.00	22.10	22.10	22.10	22.10	22.10
	甲	甲	甲	甲	甲	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲
異同10		22.30	22.30	22.30	22.30	22.15	22.05	22.10	21.90	22.20	22.00	22.30	22.30	21.85	22.00	22.05	22.00	22.05	22.00
	甲	甲	甲	甲	甲	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲
異同11		22.30	22.30	22.30	22.30	22.10	21.70	21.70	21.65	22.25	21.70	22.30	22.30	21.70	21.65	21.70	21.70	21.80	21.75
	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
異同12		22.30	22.30	22.30	22.30	22.10	21.70	21.70	21.65	22.25	21.70	22.30	22.30	21.70	21.65	21.70	21.70	21.80	21.75
	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
異同13		22.30	22.30	22.30	22.30	22.10	21.70	21.70	21.65	22.25	21.70	22.30	22.30	21.70	21.65	21.70	21.70	21.80	21.75
	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
異同14		22.60	22.60	22.70	22.65	22.40	22.00	21.95	21.95	22.60	22.00	22.00	22.55	21.95	22.00	22.10	22.00	22.00	22.05
	甲	甲	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	乙	甲	甲	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲
異同15		22.20	22.20	22.20	22.15	22.05	21.60	22.05	22.05	21.60	21.70	21.65	22.00	21.70	21.70	21.80	21.80	21.75	21.80
	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
異同16		22.50	22.50	22.50	22.55	22.40	21.80	21.80	21.70	22.50	21.90	22.50	22.50	21.65	21.80	21.90	21.85	21.85	21.90
	甲	甲	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲
異同17		22.50	22.50	22.50	22.55	22.35	21.85	21.90	21.80	22.50	21.90	22.45	22.45	21.80	21.85	21.90	21.90	21.90	21.90
	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ